

博多発船旅 2015

■はじめに

2015年春、NGO 団体ピースボートが主催する4泊5日のショートクルーズ（博多～済州島～広島～神戸）で大型客船オーシャンドリーム号に乗船した。このクルーズへの参加目的は、1～2年後この船で地球一周航海をする計画があり、船の設備の視察や船内生活の体験が主目的だ。

大型客船によるクルーズは過去2回ほど家族で行った経験がある。1994年に労働組合の企画で参加した神戸発、韓国、中国の10日間の船旅と2000年にマイアミ出港のカリブ海クルーズ5日間である。マイアミに行く前にニューヨークに立ち寄ったが、その約1年後に飛行機が突っ込むことになる貿易センタービルをこの目で見ていたのである。その時以来久しぶりのクルーズであり、以前は一緒に行った2人の子供たちも巣立ち、今回は夫婦ふたりの気ままな船旅である。

大型客船クルーズとは、大きな船ということでフェリーなどの定期航海船を思い浮かぶ人も多いが、それらとはかなり異なる。定期船でないので決められた航路がある訳ではなく、船のサイズも桁違いに大きい。簡単に言うとプールやレストランを備えたリゾートホテルがそのまま外洋つまり外国に行き、港に立ち寄りながら旅行するというもので、その船内では食事や様々なイベントが開催される。今回の船は有名なタイタニック号やクイーンエリザベス号程きらびやかではないが2つのプールに3つのレストラン、そしてバー、美容室、ジム、医療施設など必要最低限の設備が整っている10階建ての船である。

今回のクルーズ乗船が博多港のため、それに先だって友人と会うため前日から福岡県と大分県を訪れた。

この旅行は、私たち夫婦が2015年3月11日に設立した「旅のチカラ研究所」として初めて仕事である。研究所のテーマは旅の探求、旅の広報、旅のサポートである。



【写真1】 オーシャンドリーム号

■旅の初日 3月28日(土)

朝6時30分自宅出発、ANA便ボーイング787にて10時15分福岡空港に着陸した。787は最新の飛行機で、燃料効率向上のために数々の軽量化がはかられており、機体の半分は炭素繊維を使用した複合材料でできている。私はこの飛行機に初めて搭乗するが、乗客にとってはシートが簡素になっていることぐらいしかわからない。ともかく新しい飛行機は気持ちいい。

空港には福岡在住の友人のTさん夫妻が迎えに来てくれた。Tさんとはかつて箱根駅伝ルート100kmを2回に分けてウォーキング二人旅で制覇した間柄で、最近夫婦で九州と関東を相互訪問する仲である。今回は博多港出港ということで、出港までの2日間お世話になることになった。

昼食は大分の九重高原にあるTさんお勧めの「オーベルジュ コスモス」、食事と温泉を楽しむ高原の林の中にたたずむおしゃれなホテルである。さすがTさん、センスが良い。

このレストランで働くやや年配の従業員に話を聞くと、この施設はかつて国民宿舎であったという。時代の流れで民間移転して活路を見出そうとしている。確かに私が日本一周旅行をした40年前は、国民宿舎は人気があった。往復はがきで予約申し込みをして抽選の結果、返信はがきが戻ってくるというシステムで、常に満室のにぎわいをしていた頃が懐かしい。

レストランに案内されると既に2組の先客が食事中であった。早速、料理「九重夢ポークのグリル」とビールを注文した。私もアルコールは嫌いな方ではないが、Tさんにはかなわない。再開を祝して乾杯、食事が来る前に既にビール2本が空き、食事が届いたのでさらに1本追加、ポークにはビールが良く合う。と酒呑みは思いこんでいる。しかし、あまり飲むわけにはいかない。なにしろこの後にホテルの温泉に入るのも目的である。

食後、早速入浴である。お湯は鉄分を多く含んだ温泉のため茶褐色である。少しぬるめのお湯で、内湯は多分41℃、露天風呂は40℃くらいである。温泉評論家を名乗る私にとって昨今は人間温度計もこなしている。貸切り状態の風呂にのんびり浸かり、露天風呂は温泉浴と森林浴を同時に楽しめる。上空にさえぎるものがないので、夜間の入浴は満天の星空が期待できそうであるが、残念ながら今回は昼間の入浴のみである。露天風呂湯船には小さな虫たちも入浴していた。入浴というよりは迷い込んで溺れたといったほうが良いかも知れない。森の中の温泉では良くある光景であるが、私が好きな草津温泉などの強酸性硫黄泉では、その匂いや殺菌性のため虫の入浴は少ない。この温泉は入浴しやすいらしい、そんな先客についてはムシした。



【写真2】レストランの近傍の風景

そして、九州にはもうひとり I さんという友人がいる。福岡在住であるが九州訪問時にはいつもと言って良いほど大分の九重町飯田高原にある I さんの古民家別荘に宿泊させてもらう。

田舎の民家で部屋が 7 つ、庭には九州のこの地方では有名なツツジ科の天然記念物「ミヤマキリシマ」があり、裏の畑では野菜作りもやっている。

I さんは何でも自分で作ってしまう人で、農作物はおろか前回訪問時には酒飲みのためにカプセル入りの「うこん」まで自分で作っていた。そんな I さんから「旅のチカラ研究所」の設立を記念して看板をプレゼントして頂いた。厚さ 3cm、横長 80cm 程の一枚板を加工して彫刻したもので、初めて作ったとのことであるが、どうしてどうして商売出来そうである。私には事を始めるにあたって看板を掲げるということが思いつかなかった、全くのサプライズだった。



【写真 3】 サプライズの看板

I さんの待つ古民家別荘に T さん夫妻と私たちはやってきた。5 人の夕食会場は、まだ咲いていないがきつときれいに咲くだろうミヤマキリシマの庭だ。まずは定番の地鶏をポン酢と大分の地元特産の柚胡椒でいただく、その後はいつものようにバーベキューだ。

バーベキューはただ肉を焼くだけのようだが、結構奥が深いものである。I さんが下ごしらえをしてくれていたのは鶏もも肉、手羽先、串刺しの豚バラ肉、牛肉、ソーセージ、野菜と肉の串刺し、数種類の単品野菜と豊富だ。そして今回はニンニクのアルミホイル焼きをいただいた。これが結構いける。焼き芋のような食感だが、少し塩をふるとお酒にもよく合う。

味付けの基本は塩と胡椒だが、先ほどの地鶏に使用したポン酢と柚胡椒もいける。アメリカ人はホームパーティを頻繁に開くが、必ずその旦那がシェフになり、こだわりを持ってバーベキューを振舞うということをニューヨーク在住の友人が言っていたことを思い出した。

料理とビールがひととおり体にいき渡ったら、一休み。まだまだ明るいのでちょっと散歩気分で行った。そこで地元の麦焼酎らしい「なしか」なるものを発見、焼酎販売スペースの半分くらいを占めており、如何にも地元民の支持が絶大という感じがした。値段も手ごろで、味見に一本購入した。

少し体が冷えたので、さっそく「なしか」をお湯割りでいただいたが、麦焼酎のすっきり感がとても美味しかった。この「なしか」という意味は「どうしてか」に近いそうだ。大分の地元ラジオ局で「夕方なしか」という長寿番組があるそうで、それを録音して I さんが車の中でいつも聞いているとのことである。「なしか」・・・心なしか懐かしい響きとする、何やら心地良いお国言葉である。ラベルに懐かしい昭和 30 年代の愛嬌のある少年のイラストが描かれている。



【写真 4】大分の地元麦焼酎「なしか」

暗くなってきたので家に入り、いよいよ 2 次会の開始だ。まず、根菜を中心によく煮込んだ薄味の温かいスープが出てきた。うまい、酒呑みの生態を知り尽くしている。

そして I さんが冷凍庫から何やら新聞紙に包んだものを出してきた。何と南極の氷である。毎年この時期に友人からもらうそうで、白い雪を固めたような氷だ。それをオンザロックにして芋焼酎を飲んだ。不思議なことにパチパチと氷がはじける音が聞こえる。結構大きな音である。氷がはじけて中にある大昔の空気をはじけ出している。空気は見えないが音がそれを物語る。そしてそれは、なんと 50 万年前の空気だそうだ。うん、うまい。音を聞きながら飲む酒も初めてで、はるか大昔を感じながら実にうまい。

南極から氷を持ってくる人、それを分けてもらえる人、そしてそれを別荘で飲む人、人と人とのつながり、持つべきものは友である。しみじみと幸せを実感した。みんなの人生に 50 万年前を思いながら乾杯した。



【写真 5】芋焼酎「森伊蔵」を南極の氷に注ぐ

■旅の2日目 3月29日(日)

朝、近くの「荃の口温泉」というひなびた温泉に行った。ここはこちらに来たら必ず立ち寄る。入浴料200円の立ち寄り湯で3m×6mくらいの楕円形の大きな湯船だけでカランや鏡といった設備はない。鉄分が多いので茶褐色に濁っており、昨日入ったホテルの温泉と同じ泉質である。ただし、こちらの温度は熱めで、人間温度計によると43℃くらいである。私はこの素朴な温泉がとても気に入っており、今回もお世話になった。昨夜の酒が多少残った体も、この熱い湯で引き締まった。

午前中に別荘を出て、Tさん夫妻と日田市内にある個人経営の「天領日田洋酒博物館」に立ち寄った。この館長が中学1年生から収集して現在まで35年間に個人で収集したウイスキーを中心としたコレクション2万点以上を660㎡の倉庫のようなスペースに展示してある。660㎡というとテニスコート1面よりもやや広い程度だ。そして8割のお酒は未開封だそうで、さらに別の倉庫にも5万点あるというので、1点1000円としても7000万円だ。

プレスリーやモンローの人形ボトル、自動車や電車模型のボトル、マッチ棒ほどの世界最小ボトルなど、世界各国そして日本のものも含め本当に様々なお酒が並んでいる。お酒以外にポスター等の販売促進グッズなどもあり、こんなものもあつたなという遠い昔の記憶を呼び起こす懐かしいものも多い。ちょうどニッカウイスキーの創業者を題材にしたNHKの朝の連続ドラマ「マッサン」人気も手伝って、来場者も比較的多かった。

そんな収集オタクの館長の半生を本人からいろいろ聞いた。これだけの私財を投入したので奥さんや子供たちに苦勞をかけた、いや現在もかけているという半ば反省の弁も節々にあり、とにかく収集に人生をかけていることを強く感じた。

展示物で特に目に入るのは、博物館ほぼ中央に置いてあるニッカから譲り受けた北海道の余市工場で実際に使用されていた本物の蒸留装置である。かつてはニッカが焼酎王国の九州にウイスキーを根づかせようと日田に工場を造って操業していた。残念ながら、焼酎王国の壁は厚かったようで、現在は「いいちこ」の工場になっている。その蒸留装置は直径3mくらい、高さ3mくらいのラッパを逆さにした形だ。口にあたる部分を横に曲げ、全体は銅できていて重厚感がある。手作りらしく接合部分のビョウは蛇行している。

この蒸留装置をニッカから譲り受けた苦勞話を話してくれた。何度も足を運び、最初は全く相手にして貰えなかったところから、そのうち受付嬢に顔を覚えてもらい、ある時工場長と会うことができ譲り受けるお願いしたが、当然断られた。しかし常に車に用意してあったウイスキーコレクションの写真アルバムを見せたところ、大変興味を持ってもらったことで事態は進展したとのことだ。お願いにお願いを重ねた末に、最終的にはニッカ本社の取締役会の審議事項になり、承認されたという。ただし、一個人に大会社が資産を移転するためには沢山の契約書に署名捺印をして、ようやく手に入れたとの事である。



【写真 6】 蒸留装置を説明する館長

この館長の人生は一体何だろうかと考えてしまう。一つの事を極めていく、でもそれは利益の追求や家族のためでもなく、ましては国家の繁栄などとは全く無関係なもので、自己満足そのものである。自分の好きなことをとことん突き進んでいく先には何があるのか、それは他人にはわからない。でもきっと苦労話を嬉しそうに話す館長の顔をみているかぎり、一度きりの人生これで本当にいいのかと人々に問いかけているように感じられた。

博物館の一角は夜にはバーになるスペースが設けられている。そのバーの中だけでもざっと見て数百本の酒がある。どこに何があるか覚えるのが大変というバーテンダー泣かせだそう。

なぜバーテンダー泣かせなのかと思いつつ、何気なくカウンターの中から覗いてみたらその理由がわかった。カウンターに置かれたボトルのラベルは全てお客が座る側に向いているのでバーテンダーからはラベルが見えないのだ。これは確かに大変だ。プロとは極めることなりか。



【写真 7】 博物館の一角にあるバー

いよいよ大分を離れ、博多港に向かった。

博多港国際ターミナルに到着、Tさん夫婦がここまで車で送ってくれた。乗船口では船の専属らしいバンドが生演奏で出迎えてくれた。ドラム、ベース、ギターとキーボードの4人編成バンドでジャズのスタンダードナンバーの演奏で迎えてくれた。クルーズ船はどの船も同じような歓迎風景が見られるが、過去のカリブ海クルーズではバイオリンやコントラバス、ピアノといったクラシック音楽のアコースティックな弦楽器の生演奏であったりした。

乗船手続きは、乗客個人を特定できる顔写真が印刷してあるIDカードなるものが事前に配布されており、このカードを乗船時に係員に渡し「ピピッ」とカード読み取り機を通してもらう、下船時も同様なことを行うことで誰が船に残っているのかを一元管理している。カードは自分の船室のカードキーと船内の飲み食いに現金の代わりに支払いするクレジットカードの役割もすることで、このカード1枚で船内を快適に過ごせる。各自、カードケースに入れ名札のように首から掛けて船内で過ごすことになる。

乗船したものの早速問題が発覚した。携帯電話のACアダプタが100V仕様であり、船内の電源はヨーロッパ船のため全て220Vである。アダプタ購入のため一旦下船して急ぎターミナル売店まで走った。出港前に法律で義務づけられている避難訓練に参加しないといけない。結構な距離を走り、汗だくになって帰船し、どうにか避難訓練には間に合った。

避難訓練は乗客全員に義務付けられており、一斉に鳴る警告音を合図に船室毎に指定された船の階上にあるホールに300人くらいが集合し、救命胴衣の装着、非常時の対応を教えてくれるものであった。私たちが集まったホール以外にも同様な訓練を別の2つの会場でも実施しているとのことで、全員参加したことを確認するためにあらかじめ配布してあったカードをクルーが回収した。

一年程前に韓国のセウォル号という船が済州島付近で沈没事故を起こし多くの犠牲者を出したことを思い出した。あの船は避難訓練をしたのか、今回と同じような訓練だったならば私たちは大丈夫なのか、等々考えたが、結局日本の安全神話をなぜか信じている自分に気がついた。

食事のあとに7階のホールで歓迎セレモニーイベントが開催された。300人くらい収容できる円形ステージのあるホールで、観客席は後ろにいくほど高くなる傾斜があり、中央のステージを中心に扇方に広がっている。各席にはドリンクテーブルが付いており、ナイトショーなどを行うホールである。

当然参加は自由であるが、ワンドリンクサービスの触れ込みに誘われ、前のほうに席を陣取った。ステージは先ほどの専属バンドの演奏、そして博多から乗船したギタリストと女性ボーカルのステージへと続いた。このギタリストのギターテクニックはすごかった。

司会者に英語通訳がついて進行する。乗船時の避難訓練もそうであったが、全ての船内の公式イベントはこの通訳同伴形式で行われた。

酒でほんのりしてきたころ、わずかながら船が揺れ始めた。いよいよ出港した。船の揺れが心地よく、音楽のビートも加わり、これから始まる4泊5日のクルーズへの期待と日常からの解放という安ど感からか、心と体がなんだかとても自由になっていくことに気がついた。

■旅の3日目 3月30日(月)

目が覚めたら7時を回っていた、妻も寝ている。昨夜寝る前は、早起きしてデッキをウォーキングして、船内企画であるラジオ体操でも参加してから、9階のブッフェレストランでモーニングコーヒーでも飲もうかと夫婦で話していたが、結局朝食に行ったのは8時であった。

船は11時に済州島に接岸された。入国審査などの手続きは船旅の場合、極めて簡単である。昨夜のうちに対面審査なるものを受けたが、IDカードを見せてパスポート番号と照合するだけで、ものの3秒ほどで終わった。パスポートは個人管理ではなく、船に預けており紛失のリスクもない。ほとんどの場合、係官が乗船してきて船内のホールや会議室で上記の行為を行うだけである。それでも最終的にはパスポートにはFUKUOKAの出国スタンプが押される。従って、上陸の手続きはIDカードを下船口で係員に渡し「ピピッ」としただけである。

いよいよ済州島、韓国は釜山への旅行経験はあるがこの島は初めてである。この島めぐりのために日本語が話せるドライバーの貸切りタクシーを事前に日本から予約していた。ドライバーは洪(ホン)さん、聞くと1946年生まれで私よりも10歳年上である。カラオケ屋を繁華街で経営していて、5年の日本居住経験がある。そのため日本語は堪能である。

済州島は韓国最高峰1950mのハルラサン(漢拏山)を中心にした火山の島である。火山といっても伊豆大島のような現在も噴煙がでていいるのではなく、死火山という表現が適当のようだ。およそ200万年前に形成されたらしい。昨夜の南極の氷が50万年前で、今回の旅は大昔と縁がある。火山岩、火山灰のため稲作に向かず、放牧それもほとんどが馬である。

ホンさんの話では済州島は三多三無の島だそうである。三多とは岩、風、女が多い、三無とは泥棒、乞食、各住居に門が無いとのことで、三多は自然豊かで女性がともかく働く、そして三無は治安が良い事を表しているとのことである。

サングムブリという火口跡の公園に最初に立ち寄った。入口には石おじさんが立っていた。石おじさんとは石でできた像でイースター島のモアイ像を小型にして長い顔を丸めたような風貌をしている。火口跡は外周2km、深さ13mの火口跡は草と低い木が生えており、済州島にはこの様な寄生火山が360個ほどあるそうで、次々に噴火して今の島になったということだ。



【写真8】石おじさんとホンさんと妻

次に城邑民俗村に立ち寄った。韓国の伝統的な古民家集落であり、現在も居住している。その意味では、日本では白川郷のような意味あいの集落であるが、家の作りは沖縄の石垣の家の屋根をかやぶきにした感じである。

私達が到着すると一人の中年女性がこの集落を案内してくれた。韓国人であるが流暢な日本語を話す。家のつくり、トイレの方法、雨水をためる用具、子育ての話など、この集落の人々の暮らしを細かく説明してくれた。

トイレの話は面白かった。家の外に 10 畳程度の広さの柵で囲ったに場所に黒豚を飼っており、その一角の高いところにトイレがあり、汚物が落ちるところまでが豚の居住するエリアになっていて、人間が大便をすると豚がやってきて下からそれを食べるそうである。そして豚は最後には人間に食べられるという食物連鎖、究極のリサイクルシステムになっている。

そんな話を身振り手振り、小道具を使って説明してくれる。確かに女性は良く働く、彼女のきりっとした言い方がその言葉を裏付けているようであった。30 分くらい経った頃、妻が私にとひそひそ話しをしてきた。いろいろ説明してもらって申し訳なく思い、一体どのくらい謝礼をすればいいのだろうか。

しかしながら、それからしばらくしてその心配無用であることが分かった。最後に通された家でお茶が振舞われ、冬虫夏草（とうちゅうかそう、ガの仲間に寄生するキノコの種類）という健康食品の販売説明になったからだ。彼女曰く、とにかく健康に良い、そして破格の値段だということだ。世間相場に比べて高いか安いかわからないが、私には分からなかったが、手提げ袋いっぱい 5 万円くらいした。私達は丁寧にお断りしてお礼を言ってそこを離れた。



【写真 9】城邑民俗村の古民家集落

次は済州島東部にある世界遺産の城山日出峰に立ち寄った。その山を背景に菜の花畑が敷き詰められている光景が済州島の紹介写真に良く出てくる。海に突き出た陸続きの島で、日本でいうと江の島と函館山の間くらい規模で海拔 180m、日本のその 2 つの観光名所に行ったことがある人ならば、その中間的なものを思い浮かべれば分かりやすい。

この城山日出峰を登り、約 1 時間で往復した。歩きでしか登れないのでそれなりに疲れたが、頂上からの景色は素晴らしいはずである。はずであるというのは、この日は残念ながら空気もやっておりあまり視界がよくない。たぶん中国からの黄砂か PM2.5 の影響であろう。



【写真 10】世界遺産の城山日出峰の山頂から崖下を望む

次は蔓丈窟（マンジャングル）という溶岩洞窟に立ち寄った。これも世界遺産である。13.4kmの長さを誇るがそのうち 1km が公開されている。洞窟内温度は 12℃で常に一定、この時期では少々寒い。中は広く高速道路のトンネルくらいの空間である。1km を片道 15 分程度、来た道に戻るの往復で約 30 分である。自然の洞窟でこの広さ長さはさすが世界遺産であると思うが、私には長い洞窟というただそれだけしか感じなかった。

最後に韓国の庶民的な食堂をホンさんにリクエストして連れて行ってもらった。郷味食堂という繁華街の裏路地にある小さいが小奇麗な食堂で、20 人くらいで満員になる大きさである。

韓国風お好み焼きのチヂミ、サバの塩焼き、そしてチゲを 2 種類、豆腐チゲとキムチチゲ、そして食事を注文した。チゲはチゲ鍋と表現することもあるが、そもそもチゲは鍋の意味である。そして、もちろんビールも韓国産の CASS ビールと一緒に注文した。ホンさんからは黒豚料理もすすめられたが先ほどの究極のリサイクルシステムの黒豚トイレが脳裏をよぎって、注文をひかえた。

まず付出しで出てきたキムチの味が最高、白菜のシャキシャキ感があり、味がスッキリしている。ホンさん曰く朝取りの一夜漬けとのことである。

サバは結構大きなサイズであり、油がのっけてこれも美味しい。日本の関サバのように海流が強い済州島沖でとれたそうで、ブランド品らしい。そして何ととっても 2 種類のチゲが絶品である。豆腐チゲはまるやかでコクがあり、キムチチゲはトマト鍋のようでブイヤベースのようで、そして辛い。どちらも相当に美味しい。この様なチゲは初めてである。ホンさんおすすめの訳がわかった。

そのホンさんも別のテーブルで知り合いらしい他の運転手と違うチゲを食べている。味噌チゲというもので、少し分けてもらったが、これも美味かった。韓国チゲ恐るべしである。

この食堂に私達が到着した時には、既に日本人の男性 2 人組が飲んで食べていた。2 人とも私達と同じ船で来て、やはり日本語が分かるタクシードライバーに連れられてきた。

2 人は 68 歳と 78 歳、13 年前の地球一周クルーズで知り合ったとのことである。そのクルーズで知り合った何人かで年に 2 回の国内旅行を持ち回り、各々自分の地元を紹介する旅をしているという話である。今回はそのうちのメンバー 2 人でこのクルーズに乗ったらしい。

この2人組もまたまた面白い。この2人の旅は現地の人と話し本音を聞くことである。今回もドライバーからは北朝鮮問題、拉致問題、パク大統領に思うことなど本音の話を聞いてきたそうである。さらに船の中でも乗組員からも待遇（給料）等を聞きだしたとしている。

インターネットやTV・新聞では入手できない、いや入手出来ると思うが、現地現場で体験して得られた事は当たり前のことでも何か手ごたえが違うような気がする。旅する価値はそんなところにあるのかもしれない。そしてそれが自分の人生の引き出しに加わる。

そういえば、聞き出した話ではなく、聞かれたことを思いだした。概ね観光が終わり、食堂に向かう車中で、だいぶドライバーのホンさんともぎっくばらんな会話が出来ようになってきた頃である。日本の食べ物は放射能汚染されているが野菜などは食べているのか？震災以来ホンさんの周囲の人は日本の魚は食べないようにしているが日本人はどここの魚を食べているのか？矢継ぎ早に放射能関連の質問が来る。私たち夫婦はそれらの質問に驚いた。そんなふう隣国はみているのか、日本にいと分らないことだ。当然安全が確認されたものだけが市場に出回っており、日本では十分に管理されていると答えたが、あまり信用していない様子であった。

さらに東日本大震災の復興は何故進んでいないのか？日本ほどの経済大国が何をしているのか？話が義援金に及んだ。ホンさんも当然のようにお金を出したとのこと。世界中からあれだけたくさん集まった義援金は何に使っているのか？等々。日本政府の対応への不満が伝わってくる。震災復興という面では私たちより気にかけている。東北地方はともかくも西になればなるほど震災復興問題が徐々に薄らいでいることは何となく感じていたが、日本より西の小さなこの島でそれを突きつけられるとは思わなかった。これらの問いに夫婦二人で代わる代わる丁寧に答えるのが精一杯であった。考えさせられたタクシーの中であった。

店を出る頃には、2人組も、私も酔っ払い状態で、なぜか飲んでいないはずのタクシードライバーも含めみんな大盛り上がりになっていた。

済州島での費用はタクシー貸切り費用が日本円で10000円、食事とビール2本が日本円で約7000円、入場料は2人で3か所約2500円。港の両替所でのレートは日本円10000円が89000ウォンだった。

帰船後、夕食を食べに船の4階のレストランに行った。この船は4階に大きな本格的レストランが1つ、9階にブッフエスタイルのレストランが2つある。

ほとんどの乗客はまだ済州島で本場韓国料理を食しているようで、レストランはガラガラであった。本日のメニューは海老フライのカレーライス、もう食べられないと思いつつ、席につけば何とか食べてしまう自分のいやしさに呆れた。しかしながら完食は出来なかった。

夜、韓国民俗芸能サムルノリのショーが開催された。出港前で芸人たちを船に招いてのショーである。サムルは4つの楽器、ノリはパフォーマンスの意味だそう。太鼓や鐘という打楽器4つだが、シンプルで迫力があつた。各楽器は風、雷など自然を表現しており見応えのあるステージだった。満腹とほんのり気分の中、本場のショーを堪能する。なんて贅沢な生活だろうか。

■旅の4日目 3月31日(水)

のんびりとクルーズを楽しむ1日になった。

のんびり過ごすと言えば昔からよく言われている朝湯・朝酒・朝寝であるが、この船はヨーロッパ建造船なのでジャグジーやサウナはあるが日本船のような大浴場は無い。私たちが泊まっている船室はシャワーのみで残念ながら朝湯は叶わない。

朝酒については実は乗船前に楽しみにしていたことがあったが、ちょっと期待が外れた。以前乗った外洋クルーズ船では、日本を出港した途端にビールが100円程度になったが、この船ではそうではない。出港すれば日本国外なので日本の酒税を払う必要がなくなるので通常は安くなるはずである。飛行機の国際線のアルコールが無料提供されるのと同じ原理である。でもこの船は何も価格変更がないのである。無料とは言わないまでも少し安くしてもらえれば、海外クルーズのメリットを享受できるのに残念である。しかし私には大分で買った「なしか」の残りがあった。お湯と氷は8階のフロアに自動供給機があり、そこで手に入る。これは無料である。

朝寝はある程度の年齢になると朝寝したくても目が覚めてしまう。いずれにしても何か仕事があるわけでもなく、いわゆる3食昼寝付きなのである。そして毎日専属のボーイがベッドメイキングしてくれる。

そういえば乗船した初日に若いアジア系の青年が私たちの部屋のドアをノックするので開けて英語で対応すると、これから毎日この部屋の掃除やベッドメイキングを担当するというボーイの挨拶だった。見た感じ10代の少年のようなボーイに、いやボーイは少年のことだ(?)、そうか給仕のボーイは少年の派生語か、まあ何でもいいか、とにかく名前を聞いたらモハメッドと名乗ったことから、人口の9割がイスラム教徒であるインドネシア人であろうと思った。イスラム教の教えでは1日5回、メッカ(サウジアラビア)に向かって礼拝を行うので、船に乗っているとメッカの方向が常に変化するので、どうしているのだろうかなどと、いらぬ心配をしてしまった。

この青年のみならず船のクルーはほとんどがアジア系の外国人である。費用面で日本人労働者は雇えないかもしれない。でも、かえってそのほうが国際色あふれ、私にとっては面白い。

外洋クルーズはリゾートホテルがそのまま移動しているという表現を使ったが、私の友人でリゾートを研究した人がいて、彼によるとリゾートの定義は「リゾートとは貧富の格差が成せるものである」という。使う側と使われる側、そしてその格差があればある程リゾートがよりリゾートとして成立する。いかにも欧米の文化であり、多くの日本人にはどこかなじめない部分もあるかもしれないが、リゾートとはそういうものだそうだ。だから観光地や保養地に行って自分で自炊して後片づけをして、布団を敷いたり、たたんだりするのは決してリゾートとは言わない。それは単なる田舎暮らし体験であり、温泉があれば湯治と呼ぶものである。リゾート感を満喫する心の奥底にはその格差による優越感のようなものがあるのかもしれない。

大型客船によるクルーズではこのリゾート感が味わうことができ、それがフェリーや定期航路の船と異なる点である。その船の生活そのものがリゾートであるのと同時に寝ているうちに目的地まで運んでくれるという極めて便利で贅沢な旅である。

そんな事を思いながら朝から「なしか」をちびちび飲んで小市民的な贅沢を味わったが、ルームサービスを頼んでワインでも部屋に運んでもらうのが本当のリゾートかもしれない。

船の中を探索してみることにした。各種船内イベントに参加している人以外に、将棋や麻雀を楽しむ人々、他人の事は言えないが昼間からバーで飲む人、本を読む人、海を見ているだけの人、熱心に語り合う人々など千差万別みんな様々な過ごし方をしている。初日の歓迎セレモニーイベントで今回の乗船客で最年少は1歳、最年長は95歳という紹介があったのだが、確かに老若男女さまざまな人たちが乗っている。やはり60歳、70歳の年齢層が多いが、春休みということで小学生、中学生も結構見かける。20歳の若者も多い、やはり少ないのは30歳、40歳代である。会社では中心的な世代のためになかなか出られないのだろう。しかしそんな世代にこそ良い仕事をするために、この解放感を味わい、人生を考える時間を過ごしてもらいたい。

参加するグループ構成で気が付いたことがある。乳幼児はその親が連れての乗船であるが、そんなに手がかからなくなった小学生くらいの子供たちはジイジとバアバ（祖父母）と乗船するという組み合わせが目にとまる。親は休みを取らず仕事をしているが子供は春休みでもあり、祖父母は暇で資金もある、老夫婦二人より孫を連れてのクルーズは活気があり楽しいのであろう。この組み合わせは今後日本の旅行パターンの一つとなるような気がする。特に船旅の場合は結構自由に遊ばせておけるので、子供たちは子供たちで集まって何やら話したり、ゲームをしたり、船内を駆け回っていた。

午前中はB級グルメの企画ものに参加した。30名くらいが和気あいあいと参加して雰囲気は良かった。イベントが進むにつれ徐々にがっかりしはじめた。司会で先導役の2人は地球一周クルーズ体験豊富なスタッフで、多分そこそこの国内旅行もこなしているのであるが、何か消化不良である。何だろうと考えるにそもそもB級グルメの定義がなっていない。たまたま寄ったお店のラーメンが美味しかったからとか、明らかに全国区レベルの有名なA級のものとまで混ざっており、これではB級グルメは語れない。残念な気持ちが増してくるので、それならば私が企画したいという意欲が湧いてきた。いらぬおせっかいであるが、私流にB級グルメの定義をまとめてみた。

一つ目は、A級でないことつまり庶民的＝安価ということである。

二つ目は、ある地方の庶民文化に根付く、あるいは根付かせようとしている。

三つ目は、ある特定の店に限った評判メニューではない。

教訓である。イベントはその定義や目的を明確にしないと方向性を見失ってしまい、集まった観客に何も伝わらない。

午後、元朝日新聞記者の伊藤千尋さんの講演に参加した。「地球をめぐれば、新しい人生が開ける」というテーマで、旅のすすめる的なものである。本人の豊富な旅行経験、取材経験（70数カ国）をもとにした日本の常識と世界の常識は違うということを目玉にして、もっと広い視野で自分の可能性を広げて、自分や社会、日本を良くしていこうという主張をしていた。

参加は200人程度であったが、講演内容は世界のいろいろな国を題材にしたトークである。各国を紹介するにあたり、訪問経験者に挙手して貰う。例えばキューバにいったことがある人、イースター島に行ったことがある人などを観客に聞いていく。

取り上げた全ての国について訪問経験者が多くいたので、これには講演者も驚いていた。このピースボートクルーズは常連が多くなり、複数回の地球一周旅行経験者も数多く乗船しているためであろう。

しかし、それは私自身の海外旅行経験の未熟さを改めて思い知らされた。少なくとも現段階で、この領域では、とても勝負にならないということである。

さて講演の内容はというと、最初は旅のすすめなものと思ったが、実は何のために旅するか、旅をどう活かすかに触れている点が、共感できた。

16時少し前に関門海峡通過のアナウンスが流れた。左舷には宮本武蔵と佐々木小次郎が決闘した巖流島も見えてきた。本当に小さな小島である。そして17時10分頃に中国自動車道と九州自動車道つなぐ関門橋の下を通過した。人間が作った巨大な建造物であるこの大きな橋を、これも人間が作った巨大な船が通過するというどちらもそのために人間が設計し建造したものであるという極めて当たり前のことに、船のデッキは大盛り上がりをしている。私もその一人になっていることに気がついた。

多分、家にいてテレビを見ていても同様なシーンは沢山流れるが、頭でわかっていることもその場で体験することは何かが違う、これが感動であり、旅の原点なのかもしれない。



【写真 11】 関門橋の下を通過する船のデッキからの光景

夕食は特別ディナーが振る舞われた。フルコースにワイン無料サービスということで夕食会場に行くとドレスや着物などフォーマルなおしゃれをしてきている人が目立った。このクルーズの乗船パンフレットにはドレスコードは無い旨記載があったが、どうしてどうして、中年以上の女性の張り切りようには敬服した。

10人程の丸テーブルに座り、男性は私ともう一人の中年夫婦の旦那だけであとは女性ばかりである。同席の方々と適当な会話を交わしていたところ、その中年夫婦の旦那との会話の中で、その夫婦は来年の地球一周クルーズに申し込んでいるとのことで、永年働いて定年を迎えて自分へのご褒美であるという旦那の発言に、やはり同席した別の独身中年女性が「異議なし」と大きな声で賛同があった。他のみんなも同じ意見のようにうなずいていた。私も思った、異議なしと。

夜、ワールドパフォーマンスステージというショーが主催者企画であり見物にいった。乗船した時のギタリストと女性ボーカルの組以外にジャワ島の踊り、サルサ、ベリーダンスと4組の出演であった。

ギタリストと女性ボーカルの組は、特にギタリストのギターテクニックは素晴らしい。リズムギターとリードギターを一本でこなすかのようなテクニックで、ベースランを弾きながらリードをとるといふ、2本のギターがないと成り立たないような演奏をこなしていた。予め録音をしているのかと思ったが最後までそこはわからなかった。どちらにしてもテクニックはすごい。

その他はちょっと消化不良気味なパフォーマンスだった。ジャワ踊りは地味な踊りを延々と繰り返すだけで、サビや盛り上がりというものがなく、いわゆる起承転結がない。

さらにサルサはクルーズのスタッフが踊っているという、アマチュアである。

ベリーダンスに至っては、どう見ても横綱の土俵入りだ。せつかく司会者がこのダンスはダイエットに非常に良いという理由で最近女性に人気を集めているという紹介をしたが、はち切れんばかりの肉体ではフォローのしようもない。

一般参加含め学芸会的な演技と、その道を極めたプロの演技を分けるという基本的な考え方ができていないのが残念であった。

ステージが終わり、9階にある居酒屋「波へい」に立ち寄った。先程のレストランの丸テーブルで同席した2人組のおばさんたちが既に陣取っていた。同席をして一杯飲むことにした。

私たちより少し年上で独身と思われるこの女性たちは、このクルーズで知り合った同室者ということだが旧知の親友のような感じがした。もともと旅での出会いは利害関係がないことと、旅が心を解放して時間を飛び越えて急速に親密にしてくれる。

どこかの飲み屋で知り合っただけで意気投合するのと同じかもしれない。この2人もまた、帰国してからも相互訪問の旅を繰り返すのかもしれない。

■旅の5日目 4月1日(水)

朝起きたら雨が降っていた。本日は広島港に朝7時に入港である。朝食をレストランでとり、8時半頃に船を出た。

江田島にある旧海軍兵学校を訪れるため広島港から近海航路の船に乗って直接江田島に渡った。高速船で23分の旅であったが、雨はあがりつつも雲が低くなっており、海上の視界は悪い。

江田島は文字通り島である。この島は私にとって初めての上陸となったが海上自衛隊の幹部候補生学校ということで、腐れ縁友人のO君が30数年前に一年間過ごした。この友人以外に、近所に住むFさんも自衛隊幹部であり、この学校での訓練の話を時々私にしてくれたので、彼らの顔を思い浮かべながら桜が咲き誇る敷地に向かい門をくぐった。

この施設は海上自衛隊の施設であり、決して観光のためにあるわけではないが1日何回かの時間指定で専門の案内係が案内してくれる。自衛隊の施設でこのような観光案内システムがある施設を私は他に知らない。旧日本海軍の歴史が見学できると、現在の海上自衛隊の訓練生活を感じる事が出来る。

案内係の後について、施設内を20人ほどの見学者がぞろぞろ歩いていく。説明で面白かったのは私達が施設に入った門は通用門とのことで、海軍(海上自衛隊)ではあくまでも正門は海であり、公式訪問者は棧橋から上陸(入門)するとのことである。

まず、厚生棟なるものがあり、いわゆる大学の生協のような役割をするところで売店、理容室、食堂がある。売店では自衛隊隊員のために作業手袋や公式行事に使用する白い手袋、制服つまり軍服をも売っている。軍服は当然仕立て込みである。

明治時代から使用されておられる大講堂、海軍モノの映画等の良く出てくる建物で、その重厚感が素晴らしい。司馬遼太郎原作のNHK「坂の上の雲」で本木雅弘演じる秋山士官が日露戦争に向けた作戦訓練をしているシーンが目に浮かんできた。



【写真12】大講堂と見学者たち



【写真13】大講堂の中

それから隣に赤いレンガ造りの校舎、現在は幹部候補生学校庁舎で旧海軍兵学校生徒館である。建物は1888年に東京から移築されたとのことで、レンガはつるつるの手触りでとても100年以上も経っていると思えない。この建物も映画によく出てくる。

そして教育参考館なる建物に入った。ここは日本海軍歴代の大將はじめ戦死した兵士の記録が祭られている。ここへの入場は脱帽して拝礼、写真撮影も不可である。この中に「神風特攻隊」や人間魚雷と呼ばれた「回天」で亡くなった戦士の名前が全て載っていた。その人数の多さに驚いた。

戦争を強引に定義すれば、狂気と悲劇、そして歓喜や達成感、憎悪などの様々なものの集合体であるが、この特攻作戦については狂気と悲劇でしかないと思った。



【写真 14】幹部候補生学校庁舎



【写真 15】教育参考館

1 時間半の見学が終わり、昼食を来客者向けの食堂でとることにした。お目当ては海軍カレーである。旧日本海軍、そして現海上自衛隊でも、航海に出ると曜日の感覚がなくなるので伝統的に金曜日はカレーが出る。このレシピは明治時代にできたもので大変美味しいという評判である。日本にまだカレー文化が根付く前の時代に研究を重ねて出来たもので、日本海軍の威信をかけた料理である。それはもう期待に胸、いや胃袋を膨らませて海軍カレーを食した。

しかしながら普通のカレーであった。

今度は江田島の対岸にある呉に渡った。やはり船を利用し 20 分で到着した。呉には港に隣接し、JR の駅にも近い「てつのかじら博物館」と「大和ミュージアム」があり、この 2 つの施設を訪れた。

「てつのかじら」とは潜水艦のことで、自衛隊の所有する退役した潜水艦「あきしお」を陸に揚げて展示しており全長 79m、幅 9.9m、排水量は 2250t で大きな鯨のようである。塗装は背中部分が濃い灰色、下腹は赤である。その赤い下腹を見上げるように展示されている、圧巻だ。

艦内に入った。狭い 3 段ベッドやトイレ洗面所等の居住エリアや一般にブリッジと呼ぶ指令室に入り操舵席に座ることも、潜望鏡で実際に外を見ることも出来る。そういえば、腐れ縁友人の O 君はある時期に潜水艦に乗っていたことを思い出した。こんな狭いベッドで寝ていたかと思うと何やら他人事ではない気持ちになってきた。ベッドは幅も狭いが高さが極端に低い、窓もないので外を見ることもかなわず、寝返りもままならない。これは金曜日のカレーライスが楽しみになる気持ちが分かる。

こちらももちろん自衛隊施設であり、前出の江田島の学校もこの「てつのかじら博物館」も入場無料である。



【写真 16】てつのくじら博物館



【写真 17】潜水艦の内部の様子

「てつのくじら博物館」に隣接する「大和ミュージアム」は戦艦大和をテーマにした博物館であるが、呉の造船所で大和を建造したことで、その大和のすごさと最後の沖縄特攻作戦での撃沈される悲しさを伝えるものである。

約 7 万トン、全長 263m、全幅 39m という数字は、現在でも相当であるが当時世界最大最強の戦艦であった。当時の日本の技術の粋を集めて造られた。分厚い船体の鋼板であり、エンジンであり、主砲であり、サーチライトであり、造船技術そのものである。これらの技術が、戦後日本の技術立国を支えたという。

戦艦大和は同型艦が 3 隻建造されたが、大和がその 1 号艦であり、次が武蔵、そして途中から空母に改造された信濃である。武蔵の方が後から就航したので当然改良が施されており、途中から連合艦隊の旗艦を大和から武蔵に代えている。にもかかわらず、日本人にとって戦艦大和は特別な存在なのである。多分その名前がそうさせていると思う。やはりネーミングは非常に重要である。だから戦後も様々なシーンで取り上げられ、アニメにまでなってしまうのである。

そういえば旧日本海軍では戦艦の名前は全て天皇が命名したとのことである。命名といっても候補をいくつかあげて最後に天皇が選ぶ仕組みなのだが、この大和は当時命名にあがった候補は大和、そして信濃、その 2 つから大和が選ばれたそうだ。ともかく「宇宙戦艦シナノ」にならなくてよかった。いや失礼、長野県民は残念がっているかもしれない。

この博物館には 1/10 スケールの、それでも 26m もある巨大な大和の模型がある。その巨大さにより細部まで確認できることがありがたい。私は戦艦大和のスクリューが 4 つあることをこの模型を艦尾からみて初めて知った。

このミュージアムにはその他にもいろいろ興味深い展示物があった。大和の沈没後の姿の再現模型もその一つで、大和は沈没時に弾薬庫の大爆発により大きく二つに割れて海底に沈んだ。実際の海底調査の結果に基づいた再現模型が展示してある。この模型を見る限り宇宙戦艦ヤマトの発進シーンは何か違和感があるが、世の中知らない方が良い事もあるようだ。

人間魚雷「回天」の実物展示もあった。回天については出撃数も少ないし、造られた艇数も少ないので、実物をあまり見る機会はない。これだけでも十分に堪能出来る。

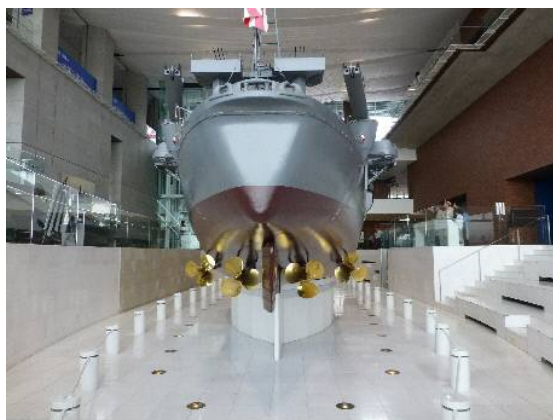
こちらは自衛隊施設ではなく、呉市が設立し運営している。そのためか入場料 500 円が必要である。

江田島と呉のこれらの施設は、私は初めて訪れたが、大変思い出深いものになった。

戦争、軍隊、それに関わる科学技術、軍需産業、そして国家、社会の繁栄、それらがもたらす人々の生活など、考えるのに良い機会と時間を与えてもらった。



【写真 18】 戦艦大和の 1/10 模型全景



【写真 19】 戦艦大和の 1/10 模型艦尾より撮影



【写真 20】 大和の沈没後の姿の再現模型



【写真 21】 人間魚雷「回天」の実物

帰船後、最後の寄港地だったので最後の出港になるので出港式なるものが開催された。甲板で生演奏と紙テープ投げのイベントが開催された。

夕食はダブルヘッダーを執行した。ダブルヘッダーとはレストランのハシゴを意味し、私の命名である。レストランはチケットがあるわけでもなく、行けば誰でも食べられるのである。4階レストランのメニューが太刀魚、そして9階ビュッフェが豚の角煮丼である。済州島ドライバーのホンさんのお勧め料理はいくつかあったが、黒豚と太刀魚が美味しいという言葉思い出した。両方とも食べたいということでダブルヘッダーに挑戦だ、所用時間は1時間半くらい大変満足であった。

帰路またもや居酒屋「波へい」に立ち寄った。

■旅の最終日 4月2日(木)

朝から結構揺れていた。本日のランチメニューは坦々麺か鰹サンドだ。別々のレストランで提供されるので、二者択一だ。鰹サンドと聞いてトルコのイスタンブールのガラタ橋付近で食べた有名なサバサンドが思い浮かんだ。これはイスタンブールに行って食べた時に感激したが、サバの塩焼きをフランスパンに挟んだものでこのB級グルメが結構美味しくて、帰国後も家で何回か作った思い出がある。

坦々麺と鰹サンドとを迷っていたが、久しぶりに麺類を食べたいということで坦々麺を選んで食べ始めた。味は坦々麺というよりは味噌ラーメンである。坦々麺は別にまずくはなかったが即座に作戦変更だ。またまたダブルヘッダーである。

鰹サンドといっても鰹のフライサンドが妥当な表現であろう。トマトを中心とした野菜と鰹フライをハンバーガのパンにはさむもので味付けはタルタルソースである。サバサンド程の衝撃は無かったが、アイデアと結果は満足のいくレベルだった。

午後、福島の中学生の船旅発表会なるイベントが組み込まれており何となく興味を感じて、そのイベントに参加した。これはピースボートが東日本大震災被災地の子供達を招待する活動を何回か実施しており、今回も南相馬市から12人の中学生が乗船していた。中学1年生つまり新学期を迎えると2年生になる中学生たちである。

ピースボートの事務局担当者が世話をする以外に、一般乗船客の若者5人を募り、その若者たちが数々の船内イベントを開催して中学生達と一緒に活動したとのことで、その様々な内容について12人の中学生から発表があった。

今回の旅で、世界を回る写真家の講演会、博多・広島という戦争被災地で感じる戦争への思い、船に沢山の外国人が乗っており外国語への積極的な関わり、職業への夢、船の生活等をしっかりと発表していた。

オープンスペースの発表会だったので、観客はどんどん増えてきて100人くらいに膨れ上がった。みんな足を止めて中学生たちの話に聞き入り、拍手を贈っていた。

大半の中学生は、緊張や体裁を考えてか優等生的発表が多かったが、そんな中で心に残った発表が2つあった。

ひとつは女子中学生のすごく素朴な発表で、他の中学生たちは原稿を読んでいたが、彼女だけは原稿無しで思いのままを自分の言葉で語っていた。一通りの感想をしゃべった後に、食べ物の話になった。博多の明太子、沖縄のソーキそばが美味しかったと、彼女にとっては初めて食べたものらしい。けれど何よりも広島お好み焼きが忘れられないとのことで、お好み焼きに麺がのって、卵がのっているというものを彼女は生まれて初めて見て、そして食べた。その味に衝撃的な感動をしたというのだ。中学生の等身大の感激が伝わってきた。

最近バーチャル体験によって満足する傾向が感じられる。例えば広島お好み焼きを実際には食べた事もないのにTVやインターネットで見ただけで、食べたことがあるように錯覚し言葉に発する人もいる。そんな風潮の中、実に素直な感想だと思った。

余談であるが、大阪お好み焼きは私の得意料理で、そのため広島お好み焼きも何度か挑戦したが結構難しいのであきらめた事がある。それらしい味は出せたが、なかなか本場の本当に美味しい味が出せなかった。

彼女は運良く本場で美味しい本物の味に出会えた。そう、運良くである。どのお店を選ぶか、何を頼むか、さらに本人の体調などにもより、まさしく運である。旅には常にそのような運が付きまとう。まさしく人生そのものである。

最後に彼女は、運良く出会ったその感動体験に対して、伝統文化を大事にすることの大切さを学んだという言葉で締めくくった。

もう一つは世話係の5人の若者のうちの一人が中学生たちに贈ったメッセージである。

1000の情報よりも1つの体験が重要である。昨今の情報社会によりインターネットやTVでいくらでも情報は得られるが、実体験によって得たものに勝るものはない。自分はこういう体験をしたことで、こう考え、こう思い・・・というように体験から始まる会話が出来るようになって欲しいし、自分もそれを目指しているというものであった。

中学生たちに対して今回の船旅体験を起点に何か始めて欲しいとのメッセージになっていた。

私も同じく思う。旅はまさしく体験することで、そこから感動をもらうものである。その感動によって人生を充実させることができる。

神戸港着岸、旅のチカラ研究所の初仕事であった。



2015年4月 植木 圭二



【写真 22】神戸入港時の私たち（船の最上階デッキにて）

■旅のまとめ

【日程】

- 3月28日 羽田発 8:20 福岡着 10:15 ANA243
大分九重高原へ移動
Iさん古民家別荘泊
- 3月29日 9時出発、日田市内の洋酒博物館に立ち寄る。
15時博多港国際ターミナル着
オーシャンドリーム号乗船宿泊
- 3月30日 11時韓国済州島到着
日本語タクシーチャーター
20時韓国済州島出発
オーシャンドリーム号宿泊
- 3月31日 終日クルーズ
オーシャンドリーム号宿泊
- 4月1日 7時広島港到着
9時下船、近海連絡船にて江田島、呉を訪問
18時広島港出港
オーシャンドリーム号宿泊
- 4月2日 16時神戸港到着
新幹線にて新大阪から小田原経由で21時30分帰宅

【費用】

クルーズ費用	88700円×2	(ボートチャージ、サービス料込)
船内飲み物	約4500円	
済州島タクシー	10000円	
済州島飲食	約7000円	
済州島各入場料	約2500円	
国内交通費	約60000円	
土産	約12000円	
合計	二人で約273400円	

【オーシャンドリーム号概要】

総トン数	35265 t
全長	205m
全幅	26.5m
乗客定員	1422人